



特集

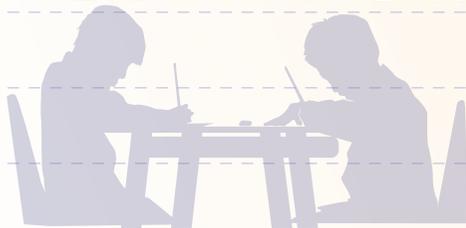
「小6統一合判」5

中学入試レポート vol. 5

2017年入試は こうして突破する！

わが子のベストの受験作戦の組み立てと、過去問対策のポイント

6年生の統一合判テストも、この11月で5回目を迎え、あとは12月4日の第6回を最終回に残すのみとなった。2017年1～2月の入試本番まで2～3ヶ月と迫ってきたが、まだまだこれからが、“実戦的な力”を身につける段階だ。今回の成績や判定結果をバネに、目標に向けて最後のがんばりを見せてほしい。その一方で保護者は、わが子の受験校を、併願校まで含めて最終的に固めていく時期になった。今回は、そうした受験作戦の組み立てと、この時期からの「過去問対策」のポイントをご紹介します。



首都圏模試センター

「21世紀の教育改革」をリードする 私学の教育の進化に注目を！

6年生のこの時期までくると、すでにほとんどの受験生のご家庭では、お子さんの「第1志望～第2志望校」は固まってきていることだろう。今回のテスト結果からも、さまざまな手応えや、今後の課題を感じ取ることができるはずだ。

ただし何度もいうように、模試での志望校に対する判定の結果が良くても決して油断してはいけないし、逆に結果が予想より悪くても、いまさら動揺する必要はない。

こうした模試は、あくまでも合格可能性の一端を探るものであり、自分の学力を、ある母集団（模試の受験生）のなかで相対的に探るためのものだ。つまり、大勢の受験生のなかで「力試し」をして合格の目安を得て、受験勉強の励みとするためのものにほかならない。だからこそ定期的に受け続けることで、その都度何らかの手応えや課題を確かめることが大切なのだ。

そのうえで、めざす第1志望校がしっかりと胸中にあるならば、こうした模試の判定結果に関わらず、来春の入試本番まで、迷わずにそこをめざして努力を重ねていくべきだ。繰り返し述べてきたことだが、中学入試の大きな魅力は、何よりも親子で気持ちと力を合わせ、「受けたい学校に思い切りチャレンジしていける」ことにある。

来春2017年の首都圏中学入試では、「2020年大学入試改革」につながる私学の授業改革・入試改革の動きに対する人気動向の変化をはじめ、やはり全体としては人気が錯綜し、そのなかで厳しさを増す学校が出てくるはずだ。それは難関校だけではなく、まだ中堅～中堅下位の私学のなかにも出てくるだろう。

いまの小学校6年生が大学受験に挑む2022年



大学進学実績の伸びも注目され、来春2017年入試に向けて人気を高めている森村学園。

には、すでに大学入試の制度が変わっている。緊急課題とされる教育のグローバル化に向けて、いま日本の教育は大きな転機を迎えている。

そうした状況下で、この先の社会で求められる「21世紀型スキル」を身につけるための新たな教育を実現すべく、大胆な学校改革に踏み切る私学も増えている。また、そうした改革に踏み出す私学ほど、中学受験生の保護者の注目を集め、一方では大学進学実績も含めた6年間の教育の成果を伸ばしている。

この数年、いわゆる「公立中高一貫校ブーム」が拡大しつつあっただけに、私立中高一貫校のほとんどは、この期に自校の教育を見つめ直し、21世紀の社会で必要とされる能力を見据え、子どもたちに何を与え、どう育てられるかを再点検したうえで、カリキュラムや指導体制を新たにするなど、学内改革を推し進めてきた。

だからこそ、いまあらためて強調したいのは、公立学校の復権策が進められてきた、この時期にあっても、今後6～7年の間（お子さんが中高6年間を過ごす間）に、公立学校をさらに大きくリードする教育展開や成果を見せてくれる私立中高一貫校が増えてくるということだ。

幅広いコミュニケーション力を持ち、世界を舞台に活躍できるエリートを育てる教育が求められている現在、そうした局面でも、それらの改革の方向性を当面リードしていくのは、早くからそうした“世界標準の”教育へシフトする地歩を築い



てきた私立中高一貫校であることは間違いない。

そうした時期だからこそ、すべての中学受験生の保護者に、あらためてもう一度「公立と私立の教育を比較する」意識と、それを検証する視点を持っていただきたいと思う。

そうした意識のもとで、数々の学校の教育内容と成果を自ら調べ、比較検討することで、「めざす第1志望へのチャレンジ」を軸に、「第3～第5志望までの併願作戦」をしっかりと固めて、最終的に「実り多い合格を勝ち得る」ことができる。残り3ヶ月の保護者の役割は、その「併願作戦の組み立て」にあると考えてほしいのだ。

受験できる機会をフルに生かして、 「万全の併願作戦」を組み立てよう！

そして、毎年繰り返し強調することだが、中学入試で“実り多い”合格を勝ち取るための「上手な受け方」のポイントは、突き詰めれば次の3点に集約できる。

それは、第1に「なるべく数多くの学校を受ける」こと。第2に「上下の幅をもって受ける」こと。第3に「(受けられる限り)最後まで明るく受け続ける」ことである。

第1の「なるべく数多く受ける」こととは「受けられるチャンスをできる限り生かして、数多く

来春2017年入試でも、新設2年目となる自己アピール(プレゼンテーション)型の「ポテンシャル入試」を実施。意欲ある受験生が集まるのが楽しみな中村中学校。



の学校(入試機会)にチャレンジすること」だ。

首都圏の約300校の私立中高一貫校が、のべ約2,300回以上(コース制などの各回入試も含め、共学校の入試を男女それぞれ別に数えた場合)の入試を実施している現在だからこそ、このチャンスをついに生かさない手はない。

ましてや受験に挑むのは、まだ調子の波もありがちな12歳の小学生。初めての入試では、あがってしまったり、緊張やプレッシャーから体調を崩してしまうなど、予期しないことが起きる。それでも最終的に「必ず1校は合格できる」ような併願作戦を、親がしっかりと組んであげてほしいのだ。

寒さ厳しい入試戦線のさなか、連日の受験に出かけるのは、体力的にも厳しいと考える保護者もいる。しかし、お子さん(子ども)たちは、親が考える以上にたくましく、強いものだ。

せっかく受験のチャンスがありながら、家で前日の結果を思い悩んでいるよりは、次の入試に前向きにチャレンジしていったほうが、よほど精神的にもプラスになる。連日の入試がきついのは、むしろ保護者(とくに付き添いのお母さん)だが、これが親にできる最後のサポートと考え、ご自身も体調に気をつけながら、何とかがんばっていただきたいのだ。

上下の幅を持たせた併願が、 第一志望校“合格”のステップになる！

第2のポイントは、「(難度的に)上下の幅を持たせて受ける」ことだ。いわゆる、①チャレンジ校(第1志望校)、②実力相応校、③押さえ校(滑り止め校)、の3つを、わが子の併願校のなかに最低各1校は組み込んでおくということである。

あえていうならば、この「ジグザグに受ける」併願の組み方がしっかりできれば、受験は7割方

入試問題との“相性”や“適性”をしっかりと探り、その芽を育てる！

～過去問題集と公開テストの両方を活用して、合格へもう1歩近づこう～

首都圏模試センターの小6「統一合判」模試も、この11月3日で第5回を迎えた。今回のテスト結果からも、さまざまな手応えや、今後の課題を感じ取ることができるはずだ。

受験生と保護者の皆さんは、こういった力試しの機会に、受験生集団のなかでの相対的な位置を確かめる一方で、この先は志望校の「過去問題集」によって、その学校の入試問題との“相性”や“適性”を探って（高めて）いく必要がある。

私学の入試問題は、その学校の6年間の教科指導方針や中高一貫カリキュラムを反映したものだ。だとすれば、その学校の入試問題との“相性”も、その学校で学んでいくための立派な“適性”に他ならない。何より入試問題と「相性が良い」ということは、それだけ「合格」に近いということになる。

この点での“選択”がうまくいくと、模試の偏差値からは見えにくかった「合格可能性」を、グンと身近に引き寄せることが可能になる。

また、最近の中学入試問題には、それ以前と比べて、「知識の量」を問うタイプの出題は明らかに減ってきた。もちろん「知識」は大切だが、単にそれを「知っている」だけではなく、いざ入試問題と向き合ったときに、その「知識」を柔軟に使い、「自分の頭で考え」、「論理的に整理し」、「自分の言葉や図で表現させる」タイプの出題が増えている。そしてそれらの問題は、決して受験生を「振り落とす」意図で作られたものではなく、個々の小学生の持つ資質や将来への可能性を「発見し」、「引き出す」ための問題だ。

こういった、受験生にとって「チャレンジしがいのある」問題が増えてきた最近の入試状況を踏まえて、各自の志望校の出題の特色をつかむことができれば、



来春2017年入試でも、新設2年目となる「日本語リスニングプラス」の「リベラルアプローチ」を実施。希望者は英語プレゼンテーションも選べる宝仙学園共学部理数センター。

これから残り3ヶ月の受験勉強の方向性や目標がはっきり見えてきて、それが励みになってくる。そしてこうなると、小学生の学力は短期間でも大きく伸びるものなのだ。

最近では、各私学の説明会に低学年の保護者が参加するケースも多くなってきたことから、対象学年を6年生とそれ以外に分けて別々に説明会を実施するケースも増えた。そこで入試を目前に控えた6年生の保護者に対しては、入試問題の出題方針や受験生に求める力を、具体的に詳しく説明してくれる私学が多くなった。ずばり「入試体験」という機会を設けてくれる私学も少なくない。

さらに最近の入試問題には、受験生の適性や長所を発見し、伸ばしていくために、独自のコンセプトやユニークな新形式の出題も増えてきた。

そういう意味でも、今秋の各私学の説明会にはできるだけ時間を割いて参加し、そこで話される2017年入試の出題方針（＝アドミッションポリシー）をしっかりと確かめておくことが大切なポイントになると考えておこう。

成功したということさえできる。

まだ11月初旬の段階では、第1志望校の選択（最終決定）を前に、併願校すべてについて検討しきれていない保護者も多いと思うが、ぜひ、この点は頭に入れておいてほしい。

もしも合格可能性の点から第1志望校を決めきれずにいるならば、「迷わず強気でチャレンジ」していくことをお勧めしたい。とくに今回のテスト

のような「合格判定」模試の結果で、可能性が50%を超えていたならば、「受けなくては損」と考えてもいい。

ただし、そうした決断をするならば、一方では必ず、先の「上下幅を持たせた併願」作戦をしっかりと心がけておくことだ。これこそが親と子の「迷いを吹っ切り」、「合格を呼び込む」勝利へのカギになる。つまり、そういう併願を確実に組み立て



増える午後入試の機会を生かすコツは、集中力と覚悟と、柔軟な気持ちの切り替え！

～午後入試の可否は、すべてプラスに受け止めて翌日以降の入試に生かそう～

■2017年にも、のべ600回近く行なわれる 「午後入試」を活用するためには？

この数年の間に急速に増えてきた「午後入試」。来春2017年には、入試の実施回数で数えると「のべ600回」近くになる。とくに2月1日・2日の入試では、完全にこの「午後入試」が浸透した。さらに3日以降、あるいは1月中の入試戦線（とくに埼玉入試緒戦の1月10日・11日）にも、この「午後入試」新設の波が広がっている。実際に今春2016年入試でも、これらの午後入試の応募者総数はのべ20,000名を超え、来春2017年にはこれを上回ることが予想される。

そして来春2017年でも、さらに多くの私学で午後入試が新設される。また女子の受験校では、2月1日・2日の午後入試の日程を移動する動きもあり、これらの学校の人気動向が注目される。

午前中に第1志望校（＝チャレンジ校）の入試に挑んだその当日に、もうひとつ「押さえ」の学校として、これらの午後入試を併願することには多くのメリットがある。

ただし、これらの午後入試を上手に生かすには、あらかじめ、受験生と保護者の「とにかく受けられるチャンスはフルに活用する！」という“覚悟”と“集中力”が必要になる。

さらには、結果しだいで翌日以降の入試に向けての「気持ちの切り替え」が求められるなど、どんな場合でも翌日以降の入試に前向きに挑んでいく強い気持ちが必要不可欠なものになる。

午前～午後と、まさに「ダブル受験」をするわけだから、それだけの体力と精神力が必要とされる。

また、場合によって（最悪の場合）は、2日のうち



共学化から4年目を迎える安田学園の新校舎(右上)。先進特待コースに加え、一般入試の人数も再び上昇してきた。午後入試もうまく選んで活用したい。

に午前・午後と二つの結果がわかり、ともに不合格というケースさえあり得ることも覚悟しておくべきだ。

しかし、もともと午後入試は（受験生と保護者にとっては）、“本命”の志望校と入試日が重なる日に、午後の時間帯にもう1校受験することで、その結果をバネに、翌日以降の入試にも「思い切りチャレンジできる」ためのもの。その点から多くの受験生親子に活用され、入試回数も拡大してきたのだ。

そういう当初の活用目的（メリット）から考えれば、たとえどんなことがあろうとも、この結果をマイナスに受け止めてしまえば“本末転倒”だ。

もちろん、午後入試で上手く（早い段階で）合格を得られれば、それをステップに翌日の入試に強気でチャレンジしていけばよい。

しかし、万が一良くない結果であった場合でも、「一回よけいに受験の練習をした（入試に慣れた）」というくらいに考えて、プラスの気持ちでその後の受験に挑んでいく。そうした強い“覚悟”を親子で持つておく必要があるだろう。

てあげることが、すなわち第1志望校に近づく大きなステップになると考えていただきたいのだ。

入試本番では、最も大きな力になる 「明るく受け抜く」親子の決意！

第3のポイントは、とにかく最後まで「明るく元気に受け続ける」ことである。簡単なようでこ

れが意外に難しい。それでも、入試本番までに親子でこういう覚悟を決め、実際に最後の最後まで粘り強く“受け抜く”ことができさえすれば、過去のケースでは必ず「合格を勝ち取っている」といってもいい。

実際に入試に挑むのは、まだ12歳の少年・少女。だからこそ、「明るく、前向きな」気持ちで入試にのぞめるようにもってほしいのだ。いい意

2月の“後半戦”の受験チャンスにも、最後まであきらめずに挑戦しよう!

～2月4日以降にもある“合格”へのチャンス。気力で挑めば突破口は開ける～

■2017年にも後半戦に、 「意外なチャンス」や「価値ある合格」が生まれる

まず、この後半戦の入試には、見た目の競争率（＝応募倍率）が非常に高くなるケースが多いが、実際には大半の受験生が前半戦で合格を得て棄権するために、実質的な競争率（受験倍率）は決して高くはならないということを知っておこう。

一般的に2月4日以降の入試では、実際にその日に受験に来る「実受験者数」は、各校の応募者の30～40パーセントまで減ることが多く、表面的な競争率よりかなり低くなる。この傾向は以前からあったが、この数年で、「複数回出願の場合の受験料割引」や「1回分の受験料で複数回出願可」といった、受験生の費用負担を軽減する措置が増えてきたことにより、受験生はあらかじめ複数回の入試に出願しやすくなり、なおさら後半戦の表面倍率は高くなる傾向にある。

つまり、そうした「見かけの競争率の高さ」を必要以上に怖がることはないということだ。たとえ前半戦の結果が思うようにいかなかったとしても、気持ちを切り替え、持てる力を十分に発揮できれば、そこにはまだまだ合格へのチャンスがある。

むしろこの後半戦には、これまで以上に受験生にとってチャレンジの価値ある入試機会が数多く生まれていると考えてよい。よく見ればいくつも「受験（再挑戦）しがいのある」人気校の入試があることを、もう一度見直しておきたい。

また、来春2017年入試では、この後半戦に「総合型」「記述・論述型」「思考力型」入試などがいくつか新設されていることにも注目したい。そうした



今春は「Mosh出願」システムの入試を、前日2月5日の3時までで受け付けを注目された豆子開成。受験生への好評だった。保護者には好評だった。

入試形式が得意な受験生には、かえって後半戦にチャンスが増えていることになる。

確かに一般的には、後半戦における、そうした人気校の入試は（前半戦に比べて）厳しいものになる。しかし、前半戦のうちに1校でも合格が得られていれば、その自信をバネに挑んでいける。「最後まで決してあきらめない」覚悟で粘り強くチャレンジし続けることで、そこには必ず突破口が生まれてくる。そう信じて、この後半戦で再挑戦を試みる勇気を持っていただきたいのだ。

親子で覚悟を固めて、最後の最後まで力強く「受け抜く」ことができれば、この後半戦で価値ある合格を勝ち取れる。そして、そうした後半戦で成功するためのポイントは、「少なくとも前半戦で1校は合格を勝ち取っておく」ことだ。

その自信をステップにして、なおかつこの入試期間に成長した力を「もう一度試してみたい」と、お子さん自身が思えたときにこそ、小学生は、大人が考える以上の力を発揮できる。そうしたわが子の成長と可能性を信じて、親子で勇気を持って、この後半戦に挑んでいってほしいのだ。

味での緊張感はあってもかまわない。また、「何か何でも合格を」という気持ちも大切だ。しかし、そういう強い意思が、逆に精神的負担にならないような、万が一のときの「備え」も必要だ。

現実には、ほとんどの受験生が、実力ラインより少し上の目標校に果敢にチャレンジし、1度か2度の不合格を経験することになる。それでも、そうした体験を乗り越えて、最後には立派に合格を

勝ち取り、自らの力で中高一貫校への入学のパスポートを手に入れている。

何度もいうようだが、この時期まできたら、第1志望校は決してあきらめる必要はない。また、あきらめるべきものでもない。ただし、お子さんが充実した中高6年間を過ごすことができ、しかもその資質や個性を十分に育ててくれる私学は、決してひとつだけではない。中学受験では「受



“合格”に満点は必要ない！ 今後の「過去問対策」では、時間を有効に使い、できる問題を確実に解き切る力をつけよう！

■第1志望校の「過去問題」演習では、まだ“合格点”がとれなくてかまわない！

すでに11月になり、来春2月の入試本番まで残すところ3ヶ月となった。受験生のご家庭では、塾の授業の復習やテストの見直しと並行して、志望校の「過去問題」に取り組む時間も増えてきたことだろう。なかには、第1志望校の過去問題でまだ思うように点が取れず、気持ちにあせりが生じるケースもあると思う。

しかし、いまの段階では決して悲観することも、焦る必要もない。毎年の中学入試で、“最難関”といわれる学校に合格する受験生であっても、まだこの時期には、そうした志望校の過去問題で合格点を取れるというケースは少ないからだ。

どの塾でも、そうした難関校の入試問題を解き切ることでできる力をつけるために、実践的な演習に取り組んでいくのがいまの時期。つまり、ここから3ヶ月間、入試での「合格力」を本格的に養っていく、まさに正念場なのだ。

それゆえに、現時点でまだ合格点に達することができなくてもかまわない。志望校の問題傾向や出題のタイプを自分自身の肌で感じ、これから先の授業や演習のなかで、「そういえば、こういう問題が出ていたな」と気づき、一つひとつ消化できるようになっていけば、この時期の「過去問」演習は目的を達成したと考えてよい。

そのためにも、まず保護者が、それくらいのゆとりをもった気持ちで、来春の入試直前まで、落ち着いて志望校の「過去問」対策に取り組むお子さんを見守っていただきたいのだ。

■自分が「解ける」問題をすばやく探して、確実に得点していくコツをつかもう！

そして、実際に入試本番で問題用紙と向き合ったときに肝心なのは、まず素早く全体にひと通り目を通して、そのなかから「自分の解けそうな」問題を見つけて、順序よく確実に解いていく力（手順）を身につけることだ。

こういう「見きわめ」の力を身につけることは決して簡単な



来春2017年入試では2月1日午後、「2科または英語」の入試を新設し、多くの人気を集めている清泉女学院。

ことではない。しかし、これまでの受験勉強に加えて、志望校の「過去問題」に何度も粘り強く取り組んでいくうちに、確実にこうした力が養われていく。本人にも“勤が働く”ように感じられるときが必ずやってくる。

■“合格”に満点は必要ない！ 全体の60～65%を確実に解き切ろう

入試問題のなかから、全体の8割の「自分が解けそうな」問題にあたりをつけ、そのうち8割を正答できれば、これで全体の64パーセントが得点できることになる。ごく一部の「合格最低点が非常に高い」学校を除けば、これでほとんどの学校には合格できる。

仮に「解けそうな」問題が7割であっても、このうち9割を確実に得点できれば、それで全体の63パーセント。いまでは首都圏の中学入試の合格最低点は平均で60パーセント以下まで下がってきているので、これでほとんどの学校には十分合格できる。なかには50パーセント台の合格最低点となる学校も少なくない。

これまで何度も強調してきたことだが、「合格」には何も満点をとる必要はない。

ある時期までできたら、自分の弱点を気に病むよりも、自分の強みに自信を持って、さらに磨きをかけるくらいのスタンスと前向きな気持ちが大切だ。

入試が近づいてきた時期にはもう一度この言葉を思い出して、最後まで自信をもって、志望校の対策に励んでいこうにしたい。

かった学校が本人にとっての一流校」といわれる所以はそこにある。

もしも入試本番で、前半戦の結果が良くななくても、そこで気落ちすることなく、最後まで「明るく、前向きに」受験できるチャンスがある限り挑戦し続けていただきたいのだ。

失敗を恐れず、受けたい学校を受けない数だけ受けて、その結果を決して悲観せずに親子で正面から受け止める。

そういう「迷いの吹っ切れた」気持ちで入試に向かうことができたなら来春の受験結果は、必ずや喜ばしいものになるはずだ。

来春 2017 年入試で新設～導入される (4 科・2 科以外の) 新たな入試形態《一部抜粋》

■加速する入試の多様化。すでに50校以上が新たな入試を導入!

7月の小6「中学入試レポート」でも一度ご紹介したが、来春から新設・導入(追加)される新たな入試はその後も増えているため、再度ご紹介しておきたい。

(●=男子校、●=女子校、○=共学校)

【新設】

(東京)

- 足立学園 2/1 適性検査型入試
- 大妻多摩 2/2 プレゼンテーション入試(帰国・国際生対象)
- 2/4 4科または総合型入試
- 大妻中野 2/4 新思考力入試
- 2/3 第2回グローバル選抜
- 京華女子 2/1 適性検査型入試
- 共立女子第二 2/1PM English 4-skills Test
- 麹町学園女子 2/2 Active English入試(国・算基礎+英語)
- 佼成学園女子 2/4 自己アピール入試
- 女子聖学院 2/2・2/4日本語表現力入試
- 2/2 英語表現力入試
- 十文字 2/4 得意型(算or英)特待入試
- 星美学園 2/1PM 適性検査型入試(第2回)
- 2/2PM 英語型(国・英か算・英)入試
- 玉川聖学院 2/2 多文化共生入試
- 東京家政学院 2/1PM KVA(国・算基礎学力テスト+面接)入試
- 2/3 KVA(国・算基礎学力テスト+面接)入試
- 東京家政大学附属女子 2/1 セレクト入試(国・算・理社・英から2科選択→国・算・英・思考力から2科選択に変更)
- 東京純心女子 2/2 適性検査型入試(2次)
- 2/4 タラント発見・発掘入試
- 東京女子学園 2/1 1科(英語リスニング・スピーキング)入試
- 桐朋女子 2/2 論理的思考力&発想力入試
- 八雲学園 2/2PM 未来発見入試(国・算・英から1科と自己表現文)
- 和洋九段 2/1PM グローバル(英語選択)入試
- 2/3PM グローバル(英語選択)入試
- 2/2 適性検査型(選択)入試
- 桜美林 2/1 総合学力評価テスト
- 実践学園 2/4 1科(日本語表現力)入試
- 自由学園女子部 3/1 2科と集団考査
- 淑徳巣鴨 2/1PM スカラシップ第2回 3科(国・算・英)か4科選択
- 2/2 未来力入試(思考の基礎力・展開力)
- 城西大学附属城西 2/2 適性検査型入試
- 2/1 英語技能(選択)入試(リスニングを含む)
- 2/1PM 英語技能(選択)入試(リスニングを含む)
- 成立学園 2/4 適性検査型入試
- 東京都市大学等々力 2/4 思考力・協働力入試
- 東京立正 2/8 第4回(2科かAO)入試
- 2/12 アクティブ入試(エッセイ+自己PR面接+基本国・算)
- 東洋大学京北 2/4 「哲学教育」思考・表現力入試
- 日本工業大学駒場 2/2PM 第4回(2科選択か自己アピール)入試
- 明大中野八王子 2/5PM B方式(4科総合型)入試

(神奈川)

- カリタス女子 2/2PM 新3科型(読解・論述+算数+理科または英語)入試
- 聖セシリア女子 2/4 B方式(算または英の1科目+「読解・表現」)入試
- 清泉女学院 2/1PM 2期(2科かグローバル(英語1科))入試
- 聖和学院 2/2 表現力・総合型入試、プレゼンテーション入試
- 2/5 表現力・総合型入試、プレゼンテーション入試
- 聖園女学院 2/3PM 総合力テスト
- 横浜富士見丘学園 2/5 未来力入試
- アレセア湘南 2/2 グローバル(英語・国語か英語・算数選択)入試

- 鶴見大学附属 2/4 総合入試(国・算2科か国・算+理・社または英語)
- 2/2 適性検査型入試
- 桐蔭学園 2/4 AL(アクティブラーニング)入試
- 桐光学園 2/4 第3回B試験(「英語資格入試」と「T&M(talent and motivation)入試」)

(千葉)

- 聖徳大学附属女子 12/1 第一志望B入試(アビリティ入試)
- 和洋国府台女子 12/1 推薦 国・算基礎学力+面接もしくは英語リスニング+グループワーク入試
- 1/24 第2回 2科(国・算)か3科(国・算・英)か適性入試
- 市川 1/20 英語選択(国・算と英語A+英語B)入試
- 昭和学院 12/6 第2回推薦「マイプレゼンテーション(作文・プレゼン・面接)入試」
- 1/21第2回一般「マイプレゼンテーション(同上)入試
- 千葉明德 1/23 英語入試(基礎国語、基礎算数、英語)
- 東邦大学付属東邦 12/1 推薦(第一志望)入試
- 麗澤 1/21 第1回EE(国・算・英か4科選択)入試
- 1/22 第2回EE(国・算・英か4科選択)入試
- 1/25 第3回EE(国・算・英か4科選択)入試
- 2/4 第4回EE(2科基礎と表現力)入試

(埼玉)

- 大妻嵐山 1/10PM ORみらい力(総合記述の予定)入試
- 浦和ルーテル学院 1/10PM E2(国・算・英3科か適性)入試

(茨城)

- 聖徳大附属取手聖徳 12/18PM 適性検査型入試
- 常総学院 12/11 適性検査型入試

(その他地域)

- 西大和学園(現地) 1/14 21世紀型特色入試(専願。書類提出と面接)
- 早稲田摂陵(適性は早大会場のみ) 1/9 4科か適性検査型入試

【追加】

- 大妻中野 2/3 グローバル(英語)入試②
- かえつ有明 2/2 思考力特待入試
- 宝仙学園理数インター 2/1PM リベラルアーツ入試
- (英語プレゼンテーション選択も可)
- 東京立正 2/8 AO(スポーツ・芸術・習い事)入試(自己PR面接+国・算筆記)

【日程・定員・表記などを変更】

- 聖学院 2/2PM→2/2 思考力ものづくり入試
- 2/3PM→2/2 思考力+計算力入試
- 共立女子 2/4→2/3 定員30→40名 C日程(算+合科型論述テスト)
- 光塩女子学院 2/1 定員約15→25名 第1回(総合型)入試(2科基礎と総合)

小学生の多様な資質と可能性を測る新たな入試



来春2017年入試では、約100校が入試を実施し、英語入試実施校も約70校に上る見込みだ。